

樋口一葉における母と娘

——「にぎりえ」、「お力」と「お初」の間に横たわる葛藤——

塚 本 章 子

はじめに

一葉の小説を概観するとき、一葉の、娘としての母（たき）との葛藤が、恐らくは無意識に小説の中に表れており、それが一葉の小説全体を貫く一つの軸となっているように感じられる。一葉における母という問題は、「十三夜」（『文芸倶楽部』明二八・一二）、「この子」（『日本之家庭』明二九・二）、「われから」（『文芸倶楽部』明二九・五）といった晩年の小説に至って、突然現れているようにも見えるが、恐らくそうではない。初期作品からずっと、母の問題は描かれているのである。

一葉は、女性の悲しみを共感を持って描くと同時に、冷徹に見つめてもいる。女性の中にある打算や欲望や、日常性になんじがらめにされた卑俗な部分を、小説中に容赦なく描き込んでいる。一方で、そのようなものから抜け出したという願いもまた描いているのである。この、女性の中に存在する二つの側面を描いているところに、一葉文学の豊穡さがあるとも言えるのだが、それを一葉に認識させていたのが、母との葛藤だったと考えられるのである。

小稿では、一葉の小説と日記という二つのジャンル間を歩き来しながら、「にぎりえ」（『文芸倶楽部』明二八・九）のお初、「たけくらべ」（『文学界』明二八・一、二九・一）の美登利の母について論じ、日記を辿り、初期の作品群にも言及し、再び「にぎりえ」に戻ってお力について述べる。そして、一葉の、母との葛藤が小説にどのように反映しているかをとらえていきたい。

そしてこのように、日記や小説群を一巡することによって、「にぎりえ」に描かれる、お力とお初という二人の女性の間には、一葉の、母との長く深い葛藤の経緯が横たわっているということを述べたい。お力と同時にお初が描かれたとき、そこには、母のように、日常生活の枠組みに絡め取られて生きることを拒み、脱却していった娘の抵抗があったのである。

一

「にぎりえ」の源七一家を描いた場面には、一葉日記に描かれたある日の場面とよく似た箇所がある。二つの場面对比してみたい。まず、「にぎりえ」から引用する。（傍線塚本、番号を付して対応を示す）

太吉を先に立て、源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお帰りか、今日は¹何んなに暑かつたでせう、定めて帰りが早からうと思つて行水を沸かして置ました、ざつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あ²いと言つて帯を解く、お待お待、今加減を見てやると流しもとに盥を据へて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと為てお出なさる、暑さにも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つて居ますからといふに、お、左様だと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、そ³ろに昔しの我身が思はれて九尺二間の台処で行水つかふとは思はぬもの、

(略) あ、詰らぬ夢を見たばかりにと、ちつと身にしみて湯もつかはねば、父ちゃん背中洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も気をつくるに、おいおいと返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしきばく⁵の裕衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帯まきつけて風の透く処へゆけば、妻は能代の膳のはげか、りて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小井に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たく持出せば、(略) 心は何を思ふとなければ舌に覚えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにすると茶碗を置けば、(略) いや何処も何とも無いやうなれど唯たべる気にならぬといふに、妻は悲しさうな眼をして

次に、明治二四年八月八日の一葉日記(「わか艸」)を引用する。

家に帰れば母君は外に出て待給へり 妹は夕げのもうけいそがわしく居たり 只今まかり帰りぬなどいふはしにいざ帯とけよ 衣ぬげよ あつかりし成べし つかれつらめ 湯もわきてあればあびてこよと残る方なくの給はするにかたじけなくもうれしくも覚えて汗の麻衣ぬぎ捨てゆ⁵あみて上ればあらひ衣の白きを出して留守のまにこれあらひて置きぬ 着かへよとの給ふ 妹は姉君ミ給へ君が好ませ給ふものにておき侍り さつまゐりもこしらへ置ぬ 夕げいざとてす、めらるゝにすぎたるはらの長き道を廻きぬればいとしくうゑたるにはいづれも美味ならぬはなくて打くつろぎてたふべ終りぬ

二つの場面は、よく似ている。どちらの場面でも、家族の帰りを待ち受けて、暑さを気遣い、矢継ぎ早に、沸かしておいた風呂をすすめ、準備していた洗いたての着物に着替えさせ、心を込めて料理した好物をすすめる女性の姿が描かれている。「にこりえ」のお初の姿には、一葉の母の姿が、付け加えれば妹の姿でもあるが、投影されているのである。

だが、それらに漂う雰囲気は異なる。この日記に描かれた場面は、慎ましいながらも愛情ある家族の幸福感、母と娘、そして妹との、温かな心のつながりを感じさせる。対して、先に挙げた「にこりえ」では、「そゝろに昔しの我身が思はれて(略) あ、詰らぬ夢を見たばかりにと、ちつと身にしみて湯もつかはねば、」¹「心は

何を思ふとなけれど舌に覚えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにすると茶碗を置けば、」とあるように、かいがいしく働くお初の心遣いが、源七にとつては一体感を持ってぬま、かえって重い罪悪感を伴つてのしかかるのであり、一家には陰鬱な気分が漂っているのである。

明治二四年に書かれた日記の心温まる家族の情景は、明治二八年に書かれた「にこりえ」のなかでは、重く暗い情景へと変化しているのである。

ここには、一葉の、母に対する思いの変化があつたと考えられる。そのことは三で述べることとして、今少し、お初がどのような女性として描かれているか見ておきたい。

一生懸命に働き家族に尽くすお初は、けなげで哀れを誘う。だが、源七から見れば、お初は自分を追い詰める存在となっている。皆が休む盆の日でも、「お前さん夫れではならぬぞへと諫め立て」、「少しは正氣に成つて勉強をして下され」と、お初は源七に働きに出ることを求める。

お初が源七に求めているのは、「お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精霊さまのお店かざりも拵へくれねば御燈明一つで御先祖様へお詫びを申て居るも誰れが仕業だとお思ひなさる、(略) いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝」とあるように、家長としての務めである。

そして、お初は「世間」に「馬鹿にされ」ない生活を求めている。

世間一体から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が来ればとて、隣近処に牡丹もち団子と配り歩く中を、源七が家へは遣らぬが能い、返礼が気の毒なとて、心切かは知らねど十軒長屋の一軒は除け物、(略) 女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、

お初は、源七にとつて、世間並みの生活を営むための金銭を求め、責め立てる者となつているのである。

源七に離縁を言い渡された時、お初は、「私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立て、来た者なれば、離縁されての行き処とはありませんぬ、」¹と言う。お初にとつて、「町内で少しは巾もあつた蒲団やの源七」との結婚は、いわゆる「玉の輿」¹だったのであり、源七が貧しい酌婦に恋したがゆえの零落、

貧困は、許せないことであつただろう。

お初は、「昼も夢に見て独言にいふ情なき、女房の事も子の事も忘れはて、お力一人に命をも遣る心か、浅ましい口惜しい愁らしい人と思ふに中々言葉は出ずして恨みの露を眼の中にふくみぬ。」とあるように、源七に愛されることを求めていなかったわけではない。だが、実際に言葉として出るのは、「お金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて困うたら宜うござりましょう、」という言葉であつた。

お初は、日常生活という次元を、離れて眺める高さや深さを持たない。むしろ、日常生活をより安寧に営みたいという願いを持ち、世間並みの妻という枠組みから自由になれない女性としても描かれているのである。

二

お初の、日常生活をより安寧に営みたいという願いを、もつと露骨に追求したところに、「たけくらべ」の美登利の母がいる。美登利の母は、実の娘である美登利を、商品としてしか見ていない、欲にかられた母として描かれている。

美登利は小説の終盤である変化を迎え、「小座敷に蒲団抱巻持出で、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。」と、ふさぎ込んでいく。美登利の変化の原因については、初潮説、初見世説、検査説など様々な議論を呼んできたところであるが、美登利を見つめる母は「怪しき笑顔をして」、「いつでも極りの我ま、様、嘸お友達とも喧嘩しませうな、真実やり切れぬ嬢さまではある」と、突き放す様な言葉を口にする。

最後の場面でも、「母親一人は、笑みては、今にお侠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに」と描かれている。一葉は、母を、娘の哀しみに寄り添わない存在として描くのである。

これまでも、美登利の母は注目されてきた。佐多稲子⁽³⁾氏は、「樋口一葉がこの母親を描いたということに、一葉の作家としての視線の鋭^{トウ}どさを感じ、このことによつて一葉の文学は近代文学である、とおもうのである。」と述べている。また、

関礼子氏⁽⁴⁾は、この母と娘の関係について、「たけくらべ」を『母性表象』の視点からとらえ返すならば、その最大の劇は(略)母親と娘との絶対的ともいえる『距離』にあるのではないだろうか。(略)それはミソジニーに近い母性忌避⁽⁵⁾であると、述べている。

この美登利と美登利の母との断絶の場面は、一葉小説の一つの軸となる問題が、最も鮮明に浮かび上がる箇所なのである。

「たけくらべ」において、一葉は、母という存在を金銭にとらわれた者として描く。美登利の母だけではない。信如の母も、やはり金銭にとらわれた者である。信如の父である和尚とのいきさつは、「和尚さま経済より割出しての御不不憫か、り、年は二十から違つて見ともなき事は女も心得ながら、行き処なき身なれば結句よき死場処と人目を恥ぢぬやうに成りけり、」というものである。そして、商売熱心な和尚の指示するままに、「霜月の西には論なく門前の明地に簪の店を開き、」、「いつしか恥かしさも失せて、思はず声だかに負ましょと跡を追ふやうに成」るのである。付け加えておけば、正太郎の母親代わりの祖母もまた、「猫なで声して人の死ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なざるやら、」と、噂されるのである。

一葉は、母というものを美しく描いてはいない。ただ、それは母だけではない。「たけくらべ」では、父もまた同様である。信如の父親和尚も、三五郎の父も、金銭に支配されている。一葉は、母もまた父と同じく、生活者として金銭に支配される存在として冷徹に描き出しているのである。

三

一葉にとつて、小説と日記は車の両輪のようなものであつただろう。一葉の日記は小説よりも早く、明治二〇年一月頃から書き始められ、亡くなる直前まで綴られていく。そこには、小説よりも日常生活に寄り添った次元での「書かれた世界」が生みだされている。このもう一つの「書かれた世界」の中で、一葉の母とのやり取りを辿り、変化を捉えていきたい。

一葉の父と長兄の死後、明治二四年頃には、母と娘は比較的安定した寄り添いあ

う関係にあったといえる。一〇月四日〔蓬生日記一〕には、「家に帰りしは八時頃 夫より母君の揉療治少して習字にかゝる」とあり、一葉は母をいたわっている。また同月八日〔同前〕、「日暮て後母君と共に薬師に参詣す 勤工場を見物す」と、共に外出を楽しんでいる。翌九日〔同前〕には、「帰宅せしは日没少し過成し母様むかひに出給ひて途にて行違ひぬ」と、歌塾から帰る一葉を迎えに出かけた母が描かれている。同月三二日〔同前〕にも、「少し暗う成にたれば途中まで母君迎ひに参り給ふ 諸共に帰りて」と、一葉を迎えに来た母と共に帰っているのである。娘は母をいたわり、母は娘を案じている。二人は頻繁に連れ立って歩いているのである。付け加えておけば、一で「にこりえ」と対比したのも、この時期の日記である。

一葉は、明治二四年四月に半井桃水に弟子入りし、二五年三月には「闇桜」を『武蔵野』に発表するのだが、この頃一葉は、母によく小説を読み聞かせている。二五年二月二二日〔二につ記二〕、「此夜小説少しよみて母君に聞かし参らす」、同月二四日〔同前〕、「日没後小説二三冊よみて母君に聞かし参らす」、四月二五日〔二につ記二〕、「此夜母君に新小説よみて聞かし参らす」といった記述が見える。小説を書き始めた一葉が、その意気込みから、母に対して小説とはこのようなものであると教えているようでもあり、心の通い合いを感じさせる情景である。

しかしこの母は、一葉の行動を制限し、飛躍を阻む存在でもあったのである。明治二四年一月六日〔蓬生日記一〕、「奥田老人参る 震災義損金を出したりといふ 我もいかでいさ、か成りとも出さばやなど思ひながら母君の免し給はぬにかひなし」とあり、濃尾大地震への義損金を出したいという一葉の思いは、母の一存によってかなえられなくなる。また、明治二五年三月二〇日〔日記一〕には、「帰宅後種々母君と談話 伊東君と約せしこと無効に成しことあり」とある。『樋口一葉全集第三卷(上)』(一九七六・一二 筑摩書房)の脚注六一には、

此日一葉と伊東夏子の二人は、萩の舎の停滞した状態について、さまざま語り合った末、伊東夏子の知る人(久米幹文)について、国学を学ぼうと相談した。帰宅後一葉はそれを母に打ち明けたが、たき子が反対したため、母の意向を書簡にしたためて伊東夏子に知らせたのである。

と書かれている。萩の舎への批判をきっかけに、国学を学ぼうとする一葉の意欲は、母の反対によって阻まれてしまう。「直に手紙をした、めて其むねを通ず 何をもなさずして今宵もふしぬ」と、一葉は失意を書き留めている。

一葉は、母の管理下に置かれ、自己の欲することをおこなえず、母が理解できる範囲の枠内に留め置かれていたのである。

そのことを最も象徴的に感じさせるのは、中島歌子による淑徳女学校への周旋が不首尾に終わった出来事である。明治二五年八月二七日〔しのふくさ〕には、「伝通院内淑徳女学校とかやに我を周旋せられんとする物語あり 我も思ふ処のべなどして帰る 母君にこの事を聞かせ奉るに喜限りなし」と書かれている。だがこの話は、一葉の学歴が小学校で終わっていることが原因で不首尾に終わる。上級の学校への進学を、父が望んだにもかかわらず、阻止したのは母であった。一葉は、明治二六年八月一〇日の日記〔塵之中〕に、次のように記している。

十二といふとし学校をやめけるがそハ母君の意見にて女子にながく学問をさせなんハ行々の為よろしからず 針仕事にても学ばせ家事の見ならひなどさせんとて成き 父君はしかるべからず 猶今しばしと争ひ給へり 汝が思ふ処ハ如何にと問ひ給ひしものから猶生れ得てこゝろ弱き身にいつ方にもく定かなることいひ難く死ぬ斗悲しかりしかど学校は止になりけり

一葉が学業を続けられなかったことは、一葉から、教師という、当時は唯一とも言うてよい安定した収入を得る道を開き、一家を困窮に追いやっていくことになった。困窮すればするほど、この進学の問題は、一家に後悔の念としてつきまとったであろう。また、萩の舎に通う、新しい教育を受けた裕福な家の令嬢たちに立ち混じる中で、道を阻んだ母への不満は、密かに一葉の心の奥底で膨らんでいったはずである。

やがて、一葉は母の管理を自ら破るのである。明治二六年四月一五日、萩の舎で噂が立ったことから桃水と絶縁していた一葉は、桃水が療養中であると聞き、母に「一度のとぶらひ」(しのふくさ)を許すように求めるが許可してもらえない。せめて手紙だけでもと願うが、それも母に禁止されるのである。一葉は、二二日になつて、母に黙って桃水を見舞う。

母の言い付けに背き、自分の気持ちを押し通したこの出来事は、一葉の、母からの離陸を示す行動であると言えるのである。

一葉一家が困窮を深めていくとともに、母はひどく嘆き、一葉との間に心理的な軋轢が生まれていく。少し、時間を戻す。明治二五年八月二八日(「しのぶくさ」)、「我家貧困只せまりに迫りたる頃とて母君いといたく嘆き給ふ(略)母君の愁傷これのみとわびし」、同年一〇月一九日(「につ記」)、「母君よりは手元の苦しさをしばし訴へ給ふ それも道理也 此月中に是非入金金の道なくはと頭を悩ます」、明治二六年三月一五日(「よもぎふ日記」)、「昨日より家のうちに金といふもの一銭もなし 母君これを苦しめて姉君のもとより二十銭かり来る」と書かれている。

母もまた、親戚、知人への借金に奔走しており、嘆きは分からぬものではない。しかし、母の嘆きは、一葉の心を圧迫したのである。それは、「にぎりえ」の、生活のために金銭を求めて嘆くお初と、追いつめられていく源七という構図に、相似しているのである。

母はやがて、娘に小説で稼ぐことを迫り、激しく娘を責め罵る。同月三〇日の日記(「よもぎふにつ記」)を見る。

母君は只せまりにせまりて我が著作の速かならんことをの給ひいでやいかに力を尽すとも世に買人なき時はいかハせん こ、よりもかしこよりも只もともにもとむるを兎角引しろひて世に出さぬこそあやしけれ 誰もはじめより名文名作のあるべきならねばよしいさ、か心に入らぬふし有ともそはしのばねばならずかし たとへ十年の後に高名の道ありともそれまでの衣食なくてやは過すか、る侘しき目見んよりはよし十円取りの小官吏にまれかた襷はなさぬ小商人にまれ身のよすが定まれば憂き事ハしらすの給ひなすこといと多し 何でもいから小説を書いて早く稼ぎなさい、それができないのなら、どんなところへでもいいから嫁に行きなさいというこの要求は、「たけくらべ」の美登利の母が、売り物として娘を見る眼差しにどこかで繋がっているものである。

母の罵りは、頻繁に書き留められていく。同年四月一三日(「しのぶくさ」)、「母君更るまでいさめ給ふ事多し 不孝の子に成らじとはつねの願ひながら折ふし御心にかなひ難きふしの有こそはかなしけれ」とある。孝行と不孝の狭間で悩む一葉が

いる。また、一九日(「蓬生日記」)には、母は「必竟は夏子の活智なくして金を得る道なければぞかし かく有らばはてもしれぬをなどいと多く、しり給ふ」のであり、「邦子は我が優柔をとがめてしきりにせむ」と、妹もまた姉を責めているのである。

そのような家族の責めを受けながら、やがて一葉の心は、家族の嘆きと距離を置き始める。同年六月二九日(「日記」)を見る。

此夜一同熱議実業につかん事に決す(略)なれども母君などのたゞ嘆きになげきて汝が志よわく立てたる心なきからかく成行ぬる事とせめ給ふ 家財をうりたりとて実業につきたりとてこれに依りて我が心のうつろひぬるものならねど老たる人などはたゞもの、表のミを見てやがてよしあしを定め給ふめり

一葉は、実業につき、小説を書くことと金銭を得ることを切り離そうと試みる。嘆く母に対して、一葉は「老いたる人などはたゞもの、表のミを見て」と記す。この言葉には、母を突き放した、娘の冷やかな感情を見ることができる。

母と娘の距離は、さらに広がっていく。同年七月一二日(「につ記」)を見る。
いでよしや大方の世ハとて笑ふて答へざるものからたれハおきて日夕あひかしづく母のあな侘し 今五年さきにうせなば父君おはしますほどにうせなばか、る憂きよも見ざらましを我一人残りともまりたるこそかへすく口をしけれ
子ハ我が詞を用ひず世の人ハたゞ我れをぞ笑ひ指すめる 邦も夏もおだやかにすなほに我がやらむといふ処虎之助がやらむといふ処にだにしたがはゞ何条ことかはあらむ いかにか心をつくしたりとて身を尽したりとて甲斐なき女子の何事をかなし得らるべき あないや／＼か、る世を見るも否也とて朝夕にぞの給ふめる 母ハ子のこ、ろを知り給はず 子も又母のこ、ろをはかり難けれバなめり おもふ事おもふに違ひ世と時と我にひとしからず 孝ならむとする身ハかへりて不孝に成行く げにか、るこそ浮よ成けれと昨日今日ぞやう／＼おもひしらる、

ここには、「母ハ子のこ、ろを知り給はず 子も又母のこ、ろをはかり難けれバなめり」という、娘と母との理解し合えなくなってしまう関係が描かれている。一葉は、自身の文学的成長とともに、金銭のために書くことを要求する母と乖離

していく。「孝ならむとする身ハかへりて不孝に成行くと、「不孝」な自分を悲しみながら、⁵⁾ 金銭を求める母を切り捨てるようにして、次第に作家としての自己実現を、日常生活とは別次元の世界のなかで求めていくのである。

同じく七月(同前)には、次のように書かれている。

人つねの産なければ常のこゝろなし 手をふところにして月花にあくがれぬとも塩酢なくして天寿を終らるべきものならず かつや文学ハ糊口の為になすべき物ならず おもひの馳するまゝ、こゝろの趣くまゝ、にこそ筆は取らぬ いでや是れより糊口の文学の道をかへてうきよを十露盤の玉の汗に商ひといふ事はじめばや(略) 母子草のは、と子と三人の口をぬらせば事なし(略) 唯読者の好みにしたがひて此度ハ心中ものを作り給ハレ 歌よむ人の優美なるがよし(略) 探てい小説すこぶるよし 此中にてなど、欲気なき本屋の作者にせまるよし 身にまだ覚え少なければどうなさ、ハこれにとゞめをさすべし さる範圍の外にのがれてせめてハ文字の上だけでも義務少なき身とならばやとてなむ

一葉は、金銭の支配する俗世間を逃れ、書くことにおいて自由の身になろうとするのである。明治二七年三月(「塵之中日記」)には、

こゝろはいたづらに雲井にまでのぼりておもふ事はきよくいざぎよく人ハおそるらむ死といふことを唯風の前の塵とあきらめて山桜ちるをことハリとおもへばあらしもさまでおそろしからず 唯此死といふ事をかけて浮世を月花におくらんとす ひとへにおもへば其いにしへのかしこき人々も此願ひにほかならじ(略) 我一身の欲をすてたのしミを捨しかして後にわがおもふまゝ、の世を得んとす

とある。そして、「我れは人の世に痛苦と失望とをなくさめんために生まれ来つる詩のかミの子なり」(同前、残簡)という言葉が見られる。

また、同じく三月(「塵中につ記」)には、

かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれどわれは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず かすか成といへども人の一心を備へたるものが我身一代の諸欲を残りなくこれになげ入れて死生いとはず天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も男も女も何のけぢめか有るべ

き 笑ふものハ笑へ そしるものハそしれ わが心はずでに天地とひとつに成ぬ わがこゝろざしは国家の大本にあり わがそばねは野外にすてられてやせ 犬のゑじきに成らんを期す

とある。一葉は、自分の生を、母の手の及ばぬ世界、精神的に母を捨てたところにある世界のなかに見出しているのである。

母と妹の嘆きは、止まることがない。同年一月一日(「水の上」)、「家は今日此頃窮はなはだし くに子は立腹母君の愚痴など今更ながら心ぐるしきはこれ也」。明治二八年五月一日(「ミつのうへ」)、「今日夕はんを終りてハ後に一粒のたくはへもなしといふ 母君しきりになげき国子さまくにくどく 我れかくてあるほどハいかにもなし参らすべければ心な勞し給ひそとなぐさむれど我れとて更に思ひよる方もなし」。同年六月一日(「水の上」)、「小説著作に従事す 全編十五回七十五枚斗のものつくらんとす いまだ筆おもふまゝ、に動かでいたづらに母君の叱責をのみうけぬ」と書かれている。

もはや一葉にとつて、家族は慰めとなる存在ではなくなっていたのである。小説家として世に認められた後、一葉は、明治二九年二月二〇日(「ミつの上」)の日記に、「かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきをおもへばあやしう一人この世に生れし心地ぞする」と記している。ここには、母と妹を背負い、彼女らの嘆きに苦しみ、ただ一人精神の世界に飛翔して、世間や母を捨てねばならなかった一葉の深い孤独がある。

しかし、日記のなかには、母を罵ったり恨むような言葉はそれほど見られない。日記という、実際の日常生活を描くという意識が強く支配するジャンルにおいて、孝行という道徳を逸脱することはできなかったのである。

日常的次元に支配され、金銭に支配される母への葛藤や批判が噴き出すのは、小説という虚構性のより強いジャンルのなかである。先に論じた「にこりえ」のお初、「たけくらべ」の母たちの姿に、それらは吐露されているのである。

四

ではここで、一葉の初期小説に目を向けてみたい。初期小説の一つの特徴として、主人公たちが孤児である、もしくは実母が亡くなっていたり、母に捨てられたりしているということがある。「大つごもり」までの小説を概観する。

「別れ霜」(『改進新聞』明二五・四)のお高の母は、「いつ頃なくなりけん」と書かれている。「たま櫛」(『武さし野』明二五・四)のいと子は、「父はと問へば、月毎の十二日に供ゆる茶湯の主が夫、母も同じく仏壇の上にとかや、」とあり、「五月雨」(『武さし野』明二五・七)のお八重は、「ニッ親引つぎきての病死」と書かれている。

また、「経つくえ」(『甲陽新報』明二五・一〇)の園は、「父といふ味夢にも知ず、(略)その母にも又十四といふとし果敢なく別れて今は身一つ」である。「うもれ木」(『都の花』明二五・一一～一二)の籟三とお蝶兄妹の両親も「仏壇のお二た方」と書かれている。「暁月夜」(『都の花』明二六・二二)の一重は、身分違いの恋をした両親の間に生まれ、母は一重を産んですぐに亡くなり、父もその後を追って亡くなったのである。

「雪の日」(『文学界』明二六・三三)の珠も「父母はやく亡せて」、伯母に育てられている。「琴の音」(『文学界』明二六・二二)の金吾の母は子を捨てて実家に戻り、父も一〇歳の時に亡くなっている。「花ごもり」(『文学界』明二七・二二～二八・四)のお新も、「おさなきにニッ親なくなりて」という境遇である。

「暗夜」(『文学界』明二七・七～一一)のお蘭も、孤独の身である。「大つごもり」(『文学界』明二七・一二)のお峰も、両親を失い伯父一家に育てられた。

「大つごもり」までの小説で、母が生きて主人公の傍に居るのは、わずかに「闇桜」だけである。そして、これらの作品の多く、特に「暁月夜」あたりまでのものは、主人公たちが恋を成就できずに、死や出家や隠遁といった結末に到るというパターンが繰り返えされており、暗く鬱屈している。

一葉自身は、明治二〇年に兄を亡くし、二二年には父を喪い、渋谷三郎に婚約を

破棄されるという経験をして、この頃、家族の死や孤独を強く感じていたといえる。しかし、母は健在であり、この執拗な母の死の繰り返しには別の理由があったと考えられる。ここには、一葉の、あるいは無意識のなかでおこなわれた、母の支配からの逃避、いわば「母殺し」ともいうべき、母からの精神的自立がなされていく過程を見てよいのではないだろうか。それは、三でも述べたが、日記というジャンルのなかでは、孝行という道徳観に縛られて表出できなかったものが、小説において表れ出ていると言えるのである。

このような初期作品のなかで注目したいのは、「花ごもり」である。一葉はここで、母という存在にはじめて向き合い、生々しく描いている。

「花ごもり」の主人公お新は、孤児で瀬川の家引き取られ、伯母のお近とその息子の与之助と暮らしている。お新と与之助は仲がよく、ほとんど許嫁の関係にある。だが有名な某省次官の娘お広が歌留多会で与之助を見せめ、お近の亡夫の友人の未亡人お辰から縁談が持ち込まれる。お近は、この話に乗るのである。

此ごろ名高き誰れ彼れの奥方の縁にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを卑劣しきこと、誹るは誹るもの、心浅きにて、男一疋なほどの疵かはつかん、草がくれ拳をにぎる意気地なさよりも、ふむべき為のかけはしに便りて、を、しく、たたく、栄えある働を浮世の舞台にあらはすこそ面白けれ、お新がことは瑣細なり、与之助が立身の機は一ト度うしなひて又の日の量り難きに、我れはいさ、かも優しく脆ろく通常一とほりの婦女気を出だすべからず、

お近は与之助の将来の出世を望み、お新を裏切つても、与之助をお広と結婚させようとするのである。

ここには、女性ゆえに、自分自身が求めても得られなかった立身出世や社会的成功を、息子という存在においてかなえようとする母の欲望がある。「与之助が世間一ト通りの働きをなしつ、世に抜けいでたる考へのあらぬさへ恨めしく、望みは高くせよ、願ひは大きくせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、(略)取るべき道の重大なるに寄りて進み給へと、これは平常の詞なりけり。」とある。

この欲望は、「世の人よりは柔らかに穏かすぎたる良人を持ちて、万事にもどかしく歯がゆかりし年月も、流石女子の我が一存をふるひ難くて、空しく胸のうちに納めたりし思ひは、中々に消えんとせず、ともすれば燃え出で、押へ難き炎に身をも焼くめり、」とあるように、夫によっても叶えられず、お近の胸中でくすぶり続けてきたものなのである。

お近は与之助にお広との結婚を迫り、しぶる与之助を、お辰と示し合わせて屈服させてしまう。そして、お新は家から出されることとなる。華族の家への奉公か、田舎へ引きこもる仲のよい画師夫婦の話し相手となるか、選択を迫られたお新は、自ら画師夫婦と共に田舎へ行くことを選ぶ。理由を問う与之助に、お新は、「兄さまもお画はお好きなるに、私は画が学びたう御座りませぬ、」恋しき時にお姿をかきても慰さめられまする事故」と言う。与之助は、「利き刃にてゑぐるゝやうに」苦しむのである。

このお新の選択は、お近と与之助の裏切りを批判するものとしてある。すなわち、お近が「鬼」となって捨てた将来のつましく温かな家族を、お新は、「手を携へぬ時なく、寸の間もはなれざりし」という愛情ある画師夫婦に求めたのである。また、お近が与之助に託した現実世界における栄達や立身出世の欲望を批判するものとして、絵画という一つの芸術世界への探求を提示したのである。⁶⁾それは、息子に託して自己の出世の欲望をかなえようとする母という存在への、疑問符でもある。そして、これは一葉の母からの離陸を表してもいるのである。一葉の雑記「筆すさび一」(明二四・六―二五・夏)を見る。

母君はいといたく名をこのミ給ふ質におはしませば兎賤業をいと名めば我死すともよし 我をやしなはんとらば人めミぐるしからぬ業をせよとなんの給ふそもことはりぞかし 我両方ははやう志をたて給てこの府にのほり給ひしも名をのぞミ給へば成けぬ

一葉の母もまた、甲州から夫と駆け落ちするかたちで江戸に出て、苦勞の末に士族の身分を手に入れたという、立身出世を望んだ人であった。

初期作品の中で母の死を執拗に描いてきた一葉は、ようやく「花ごもり」において、母と向き合い、冷静に鋭く捉え始めたのである。そして、お新の、絵を描いて

生きようとする選択には、「名をこのみ給う」母の強い出世欲や、富や家の名にこだわる価値観から、芸術の世界に生き、母とは異なる価値観を持つことによって、逃れようとした一葉の思いが反映されているのである。

しかし、この母お近の情念、「燃え出で、押へ難き炎」は、「にぎりえ」のお力、「わかれ道」のお京、「うらむらさき」のお律といった人物を通して、一葉小説の中心うごめき続けるのであり、一葉の中で生き続けていくのである。⁷⁾

それは、一葉の母の欲望が、単なる世俗的成功や立身出世とはまた異なる欲望となつて、娘一葉の欲望として継承されていくと言つてよい。

「にぎりえ」のお力が、客の結城朝之助に「お前は出世を望むな」と言われ、「えつと驚く場面がある。お力が驚いたのは、結城の言葉が、何かをなさずには死んでも死なれぬというお力の「押へ難き炎」に触れようとした言葉だったからである。そして同時に、お力の望むものが、男性の言葉としての「出世」、すなわち世俗の「立身出世」という概念には収まりきらぬ、崇高な精神的世界への希求を持つものである以上、半ば的のはずれた言葉でもあつたからである。

この場面は、母と妹の嘆きを切り捨て、小説の世界で立つことを求めていった一葉の心象を反映しているのではないだろうか。

五

「にぎりえ」のお初から始まったこの論は、再び「にぎりえ」に戻り、今少し、お力について述べることにする。

お力は結城の前で、「これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ」という言葉を口にす

る。お力は、「九尺二間」の夫を持つことを拒むのである。「持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ」、「持たれるは嫌なり」というお力は、誰かの妻、そして母となる生き方を拒んでいる。お力は、「分らぬなりに菊の井のお

力を通してゆかう」と、身を売る商売であっても、自分の力で生きようとしているのである。

これらのお力の言葉は、男性に「添う」生き方をして「九尺二間」に暮らす、お初のような生き方を拒否する言葉となっている。お初のように「世間」の目を気にして、日常から逃れられず、金銭に追われ、夫に金銭を求める生活をお力は拒否していると言える。

それは、お力にとって、自分の母のあり方を拒むことになっているのである。お力の母は、作中ではほとんど描かれていない。しかし、職人として「名人と言ふても宜い」ほどの腕を持ちながら、「氣位たかくて」稼げぬ夫と、貧しい生活に耐えていたことが分かる。

「寒中親子三人ながら古裕衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらす」とき、母は「欠けた一つ竈に破れ鍋かけて」、お力に米を買いにやらせる。「芸」に没頭する夫、「食」に心を砕く妻、夫と妻との交わらぬ視線が、源七お初夫婦だけではなく、ここにもある。

お力は、帰り道で母に頼まれた米を溝にこぼし、帰られなくなる。そのお力を、母は「案じて」迎えに来る。だが、家の中の光景は悲惨である。「母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る物もなく、家の内森として折々溜息の声のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日断食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。」とある。娘は自ら償うことが出来ず、母もまた娘の過失を補ってやるのが出来ない。この出来事によって、母と娘は分断されるのである。⁸⁾やがて、お力の眼には、母は非力で、夫の陰で貧にやつれ不遇な生を送ったものと映っていくであろう。

お力は、母ではなく、父と祖父の生に自分の生を重ねる。「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落してお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう」と、お力は思うのである。

父親は、「名人」といえるほどの職人でありながら、世間と妥協せず、家族を飢えさせても自分の「飾の金物」を細工する「芸」の道を貫いた。そして祖父は、

「四角な字をば読んだ人で」、「世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかに断食して死んだ」とあるように、凡庸な生を否定し、世間の制度の枠からはみ出しても、自己の世界を追求しようとしたのである。

お力が、父や祖父の生き方に自分を重ねるのは、制度にからめとられた世間から逸脱し、貧困や孤独を引き受けても、観念における自由な世界を模索する主体的な生を肯定するからである。

このお力の苦悩の中に、三で日記を辿りながら述べたような、母と妹の嘆きに苦しみ、精神世界に飛翔することによって、世間と母を捨てねばならなかった一葉の深い孤独を見ることができるのである。

「にこりえ」には、お力とお初という二人の女性が、源七という一人の男性をはさんで、対照的に描き出されている。お初は、自分たちの生活を破壊したお力を「鬼」と罵る。お力は、源七一家への罪悪感にさいなまれつつも、「持たれるは嫌なり」というお初のような生き方を否定する言葉を口にする。

最後の場面で、お初はお力が太吉に買い与えたカステラを溝に投げ捨てたことによって、源七に離縁を言い渡される。そして、このことが引き金となって、お力は源七によって斬られ命を落とす。お初とお力は、はからずも互いを傷付けあうのである。

太吉を連れて出て行くお初行く末が、酌婦になるしかないのなら、お力との交点を将来に結ぶことは可能である。お初も結局は、お力のように一人で生きるしかないのである。一葉は、両者の和解と共感の地平を描き込むことを、決して忘れてはいない。しかし、このお力とお初という、女性と女性の関係の断層面が描き出されたことの中には、一葉における母との葛藤という、一葉文学の根幹にも関わる問題の一つが潜んでいるのである。

おわりに

小稿では、小説と日記というジャンルの間を行き来しながら、一葉の母との葛藤

を見てきた。「にこりえ」のお力とお初の間には、一葉の、母との葛藤の経緯があったのである。

一葉一家の零落、貧困は、一葉から家族との安らかな一体感を奪っていった。日常生活の維持に心を砕き、貧を嘆き続ける母から、一葉は文学の世界に逃れ、その世界で生きることによって心の平安を得ようとする。しかし、それは同時に、一葉に深い孤独をもたらしたものである。

「たけくらべ」の美登利とその母との、理解し合えぬ関係を示す場面は、一葉文学の特質の一つが、最も特徴的に表現された場面であるといえる。

一葉の小説は、「にこりえ」の後、「十三夜」の、太郎の母としてのお関、「この子」の語り手、「われから」のお町の母美尾など、母と子の関係をとらえていくようになる。一葉の描く母は多様である。「十三夜」のお関は、太郎を捨てることが出来ずに離縁を断念する。「この子」の語り手は、子供への愛情を手がかりに、夫との関係を修復させる。「われから」の美尾は、乳児のお町を捨てて出奔するのである。これらの母と子の描かれ方については、また詳細な検討が必要であろう。しかし、晩年の小説になって突如焦点を当てて描かれているようにも見える、この母と子という問題は、決して突然に描かれたのではない。それは初期の頃から、母と娘の葛藤として潜在していたものが、改めて意識され、表出していったものと考えられるのである。

一葉の娘としての母との葛藤は、一葉文学全体を見渡し得る一つの重要な問題なのである。

注

(1) 笹川洋子氏は、「言語行為から読む『にこりえ』 試論—お力の苦悩と愛における心的二重性をめぐって」(『親和国文』第四〇号 二〇〇五・一二)で、「お初の身の上を考えると、身寄りのない身から布団屋の女房という、一度は玉の輿にのった女性である。」と述べている。

(2) 遠藤伸治 有元伸子「樋口一葉『にこりえ』における性の二重規範」(『近代文学試論』第三五号 一九九七・一二)に、「お初は、自分を女性として愛しんでほしいという願い・源七の気持ちを独占しているお力への嫉妬(略)などの数々の思いを率直に言うことにはばかり、内面に閉じ込める。その代わりにお初が源七に対して口にするの

は、御先祖にも申し訳ないし、息子のためにも改心して(家)のために働いてほしいという、(妻)として、(母)としての言葉ばかりである。」とある。

(3) 佐多稲子「たけくらべ」解釈へのひとつの疑問」(『群像』第七〇巻第五号 一九八五・五)

(4) 関礼子「母性表象」におけるジェンダー—「たけくらべ」・「鳳仙花」をめぐって—」(『日本近代文学』第五五集 一九九六・一〇)

(5) 笹川洋子氏は、この箇所について、「十三夜」 試論—ジェンダーと言語行為をめぐって—(『親和国文』第四一号 二〇〇六・一二)で、「一葉はその時代の『孝』という常識感覚を持ちながらも、ある時は常識を突き抜け、真実に真っ向から対峙していく。」と述べている。また、張晋文氏は、「樋口一葉における孝行—「たけくらべ」を視座にして—」(『国文』第一〇八号 二〇〇七・一二)で、「たけくらべ」の子供たちが「家」

の重圧を背負い「孝子」であろうとしていることを論じ、一葉の、母との関係を「孝」の視点から捉えている。そして、日記のこの箇所を挙げ「常に愚鈍な言動を繰り返し、見栄を張った母親の余りにも現実に背いた要求によって、とうとう『不孝』にならなければいけない人間の絶望的な諦観が一葉には生じてくる。この長い述懐の背後には、一葉の親子関係への不信と人間世界での孤独感が密かに滲みこんでいるだろう。」と述べ、「精神世界と現実世界における矛盾は、一葉に、文学作品の表現世界でその解放の出口を見出させようとしたのだ。」と指摘している。

(6) 大河晴美「抵抗としての(空白)—「花ごもり」 試論—(新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』一九九四・六 學藝書林)に、「お新の抵抗が、言葉で語るより、黒沢を選ぶという行為によって示されていたのと同様、ここでもお新の『心の内』を表すのは、言葉ではない『畫』である。(略)お新はただ受け身的に甲斐の田舎に去ったのではない。」とある。

(7) 藪禎子氏は、「一葉文学の成立と展開—魔を中心に—」(『藤女子大学国文学雑誌』第二四号 一九七九・三)で、お新について、「平凡な日常、平凡な女の中でもややと鬱屈しているものが、『鬼』とか『蛇』とかいう形で吹き出してくる、そうした所に立っている。」と述べ、その後の一葉文学の「魔」や「狂」なるものを辿る中に位置付けている。

(8) 山崎正純氏は、「李良枝と樋口一葉—(母)の背理—」(『国文学解釈と教材の研究』第四九巻九号 二〇〇四・八 学燈社)で、お力が溝に米をこぼした場面について、母の「期待を裏切り(母)のものを失ってしまった(娘)の目前で、(母)との絆は一瞬にして消えてしまったのだ。」と指摘している。